

|   |   |
|---|---|
| セッション   | B. 語彙論：語の形成 (2014.3.22 於 北京日本学研究中心)                       |
| タイトル  | 複合動詞における動作性と状態性について —名詞形との関りから—                           |
| 著者名(所属)   | 志賀 里美(学習院大学博士後期課程院生)・竹内 直也(恵泉女学園大学非常勤講師)                  |
| 連絡先 Eメール  | tontonburiburi@live.jp (志賀)・take1234@basil.ocn.ne.jp (竹内) |
| <p>一般的に、「駆け出す」のような複合動詞(以下VV)は、連用形とすることで「駆け出し」のように名詞化できる(以下VN)とされているが、同じ「～出す」であっても、「思い出す」は「思い出し」にはならない。では、複合動詞が名詞化する場合(以下VV-VN)と、しない場合の特性は何だろうか。</p> <p>本研究では、「～切る」「～出す」「～掛ける」「～合う」「～込む」という5語について、支配項及び意味の動作性・状態性という観点から、複合動詞名詞化の特性を抽出する。</p> <p>手順としては、まず、国立国語研究所の『中納言 1.1.0』を用い、5語の複合動詞の用例を抽出する。その後、それぞれの語についてVV-VNの対応を格助詞がつけられるかという内省判断により判定したのち、後項動詞が動作性・状態性どちらの傾向が強いかという点から、名詞化の許容度を検討する。</p> <p>最も動作性が強いと考えられる「切る」は、「×乗り切り」のようにほとんどの例で名詞化できない。ただし「使いきり+カメラ」など「VN+N」で許容される例もあるが、これはVN単独で名詞として機能することはない。また、格がつく場合、「締め切り」のような慣用的なものや「貸し切り」のように一回性を有するという特徴が見られる。これらは広義の状態性を有していると考えられる。そしてVV-VNの対応関係から見ると、「踏み切り」は「ラインを踏み切る—○ラインの踏み切りが大切だ」、「捜査に踏み切った—×捜査の踏み切りが行われた」のように、VVの持つ全ての意味を名詞化できるわけではない。</p> <p>次に「出す」であるが、これも動作性が強いので、許容できる例は少ないが、「売り出し」「歩き出し」のように継続的動作で、かつ途中で制御可能なものの「開始点」のみを切り出す場合は許容される。また相撲用語「押し出し」、芝居用語「打ち出し」など、ある特定の分野でのみ使える例が目立つ。</p> <p>「掛ける」は、「出す」と同じような傾向がみられるが、「問い掛け」「働き掛け」のように比較的名詞化しやすい。これは「話し掛ける」のような①「動作の途中(動作性)」の意味と、「問いかける」のような②「完結した動作(状態性)」の意味との両者があるためである。前者は「治り掛ける—治り掛け」、「歩き掛ける—×歩き掛け」のように名詞化するものとししないものに分かれるが、後者は原則的に名詞化する。</p> <p>「合う」は「付き合う(主に男女が恋愛関係として交際する)—付き合い(人と人との交際)」のように、やや意味の限定が起こるが、ほぼ名詞化する。また名詞化すると、「奪い合う—奪い合い」のように「<u>それをお互いに行う</u>こと」と一括りにして全体像を示すもの(「<u>動作</u>+こと」となり、本発表では広義の状態性と捉える。</p> <p>後項動詞が「込む」の場合、「締め込む」のようにVVではやや不自然なものと、「考え込む」のように自身で行為が終結する動詞以外は、全て名詞化する。これは「込む」という後項動詞の意味が①中に入った状態にする「取り込む」、②目的達成のためそれを十分行う「売り込む」、③すっかりその状態になる「黙り込む」のように、「込む」そのものが状態性であることに起因すると考えられる。</p> <p>以上のように、「締め切り」のような慣用的に使われるものを除くと、複合動詞は、後項動詞が動作性を有する時には名詞化しにくく、状態性を有するときは名詞化しやすい傾向が見て取れる。また、動作性を持つとしても、「奪い合う—奪い合い」のようにその動作を一括りに捉えられるときや、「読み掛ける—読み掛け」のようにその動作の結果状態が取り出せるときは名詞化することができる。これを広義の「状態性」と捉えれば、VV-VN対応がなされるときは状態性を持つ場合であると解釈できるのである。</p> |   |
| 参考文献  |   |
| 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房   |   |
| 岡村正章(1995)「『典型的な動詞連用形名詞』に関する一考察」『上智大学国文学論集』28   |   |
| 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店  |   |
| 西尾寅弥(1961)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43号 国語学会   |   |